私と聖書

鍋谷堯爾

前書き

2 年半の監修と執筆ののち、聖書神学事典が完成、7 月 2 日に出版記念会が無事終わり、さて 3 月に依頼のあった「福音主義神学 41 号」への執筆依頼文を改めて開いて驚きました。期日は 8 月 31 日、執筆分量は 1 万 5 千字〜1 万 8 千字とあります。これは大変な分量ですぐには書けないなと思いました。しかも、内容は、「40 年間の歩みを振り返り、その評価、今後への課題、後進の者たちに対する助言、苦言など、叱咤激励をお願いする」そして、「鍋谷には聖書神学の分野を中心に」ということでした。

私には、福音主義神学会の 40 年を分析評価するとか、まして、若い先生への助言などのおこがましい文章を 1 万 5 千字〜8 千字も書く自信はまったくありません。ただ、自分が 40 才で創立にかかわり、今、80 才になったという 40 年間の厳粛さというものは身に沁みています。創立の頃は、イザヤ書の研究の一応の区切りもつき、もっと自信があったように思えます。今は、昨年から、「創世記を味わう」に取り組んでいるせいでしょうか、どこまで行っても、「トーフー・ワ・ボーフー」で、なかなか「光」まで至りません。向こうに見えるのは「やみ」、わずかに「神の霊」がおおっているのが支えのような今日この頃です。それで、「私と聖書」という一文をしたためて、読者の皆さんにあとは、おゆだねすることにしました。

生い立ち

もう 11 年も前のことです。「少年 H」という小説が講談社から出版され、200 万部が売れるというベスト・セラーになりました。この小説を書いた妹尾

河童君は、神戸二中（現在の兵庫高校）で私と机を並べた同級生です。大平洋戦争の最中の 1942 年に中学に入り、勉強よりも、軍事教練、校舎を改造した三菱の軍需工場でのモーターづくり、校庭のさつまいも畑への水やりで毎日は過ぎてゆきました。3 年生になると、毎日、防空演習が始まりました。3 月 17 日と 6 月 5 日の空襲で神戸の町は灰塵に帰しました。3 月 17 日午前 1 時に始まった空襲は神戸の町の 3 分の 2 を焼き尽くしました。「H は、自分が住んでいた街が、こんな風に見渡せるようになると、とても狭くてちっぽけだったことに気づいて戸惑った。昨日までは、もっともっと広い街だと思い込んでいたからだ」（少年H）。

妹尾カッパ君の両親はクリスチャンでした。特に、母親は熱心なクリスチャンでした。当時、クリスチャンは「非国民」よばわりをされて迫害されました。牧師は、特高警察に呼び出され、「天皇陛下とキリストとどちらが偉いか」と質問され、「キリストです」と答えると、留置所に入れられ、拷問を受け、中には、死ぬ人もありました。

しかし、一般の市民は、ひたすら天皇陛下を「現人神」であるとして拝まされ、学校の校長は、空襲になると、なによりもまず、ご真影と教育勅語を持って、安全な場所に移すことが義務でした。すべての宗教は、国家神道の下に統合され、それに反対する教派は解散するか、迫害を受けました。

聖書との出会い

私が聖書と初めて出会ったのは、今から 59 年前、三田にある結核サナトリウムに入院中のことです。その当時、日本では、結核の死亡率が一位でした。療養所に入れば、5 人にひとりは、裏門から出ると言われた時代でした。私の病気は、右肺の下葉にある卵大の病巣で、気胸とか気腹とかでは治りにくい位置にあり、まだ、ストレプトマイシンとかヒドラジッドなどの新薬はなく、「大気、安静、栄養療法」が唯一の治療法でした。当時は、まだ食料は十分でなかったので、松林の中に建てられた粗末な病室で、昼も夜も、夏も冬も、開け放たれた開放病棟でただじっと寝ているだけの毎日でした。6 人部屋でしたが、上を向いて臥せっているだけで、隣のベッドの人とずっと話をしているわけにはゆかず、天井の節目を数えながら、いろいろものごとを考えていました。

最初は、学校のことが気にかかっていました。開けっ放しの病室に「絶対安静」を命じられて寝ているだけの毎日でしたが、そのうちに、悪くなった患者が個室に移り、数週間後に喀血とか、呼吸困難で亡くなっていくのを見ると、自分も明日はそのようになるのではないかという不安が襲ってくるようになりました。

ある時、一人の男性が、「バイブル・クラスにはいりませんか？」と誘いに来ました。その当時、600 人の患者のうちで、100 人の人がバイブル・クラスの会員でした。（カトリックの会員が別に 50 人）。入会するとすぐ、彼は一冊の聖書をもってきました。それは、アメリカで印刷された贈呈用の新約聖書でした。私は貪るように聖書を読み始めました。全部を読みとおすのに何日もかからなかったと思います。普通の本と違って、文章はそれほど難しくありませんでしたが、何か納得しがたい感じがありました。もう一度読んで見ました。

また、もう一度、読んでみました。マタイ伝、マルコ伝、ルカ伝、ヨハネ伝と読み進めるうちにひとつの「ことば」にひっかかりました。

イエス言いたまふ「我はよみがえりなり、いのちなり、我を信ずる者は、死ぬとも生きん。おおよそ生きて我を信ずる者は、とこしえに死なざるべし。汝、これを信ずるか」（ヨハネ 11 章 25－26）。

当時は、まだ「口語訳聖書」はなく、大正訳と呼ばれた文語訳聖書でした。このことばを信じて、58 年前、1952 年のイースターに洗礼を受けました。

いやしのことば

洗礼を受けて翌年、当時始まったばかりの肺葉摘出手術を受けた私は、完全に病巣を摘出することができました。また、ストレプトマイシンや、パスや、ヒドラジッドなどの新薬の出現により、結核は不治の病ではなくなりました。1955 年、完全にいやされた私は、大学に復学しましたが、とりあえず聖書の勉強をしようと神戸ルーテル聖書学院に入学しました。

そのとき与えられた聖書のことばは、イザヤ書 53 章 5 節でした。

イエスは、そむきの罪のために刺し通され
私のとがのために砕かれた。
イエスへの懲らしめが私に平安をもたらし、
イエスの打ち傷によって、私はいやされた。

聖書では、イエスは「彼」であり、私は「私たち」です。私は洗礼を受けて、十字架の罪の赦しの福音にあずかり、3 年後、完全ないやしを経験しました。それは私には、目には見えないけれども、今日も生きておられるイエス・キリストの恵みのわざによるのであり、それが、イザヤ 53 章 5 節に一言で表現されているように思えたのです。それ以来、イザヤ書は聖書の中でも特別の意味をもつものとなり、何時の間にか生涯のライフワークになりました。そして、できれば原語のヘブル語で読んでみたいという希望をもつようになり、1959－61 年、神戸の青谷にある神戸ルーテル神学校から、週に三回、二年間、当時、神戸市灘区高羽にあった改革派神学校まで、ヘブル語を学ぶため通いました。ギリシャ語よりも、先ずヘブル語を学んだこと、そして教わったのが榊原先生であったことが、聖書への自分の感性を決定的にしたと思います。榊原先生は私より一つ年下の 1931 年生まれ、当時、甲子園教会の牧師をしながら、神学校でヘブル語を教えておられました。教科書はワイングリンの「ヘブル語文法」で、説教作成のためには先ず原語テキストに当たるべきであるということを教えられました。

神学のまなび

1956 年、神戸ルーテル聖書学院を卒業するとすぐ、神戸ルーテル神学校の開校準備のため、私は大学に復学することを中断し、通訳兼主事として働くようになりました。神戸ルーテル神学校の初代校長はアンダース・ホアス、教授はＪ．Ｍ．Ｔ．ウィンテル、Ａ．Ｊ．スタイワルト、Ｋ．チョース氏の４名に、ギリシャ語の橋本竜三氏、伝道学に本田弘慈氏、比較宗教に橋本巽氏などでした。聖書学院と神学校は、ノルウェーの敬虔主義の流れに立ち、神学的には、オスローの独立神学校の神学です。20 世紀のはじめ、オスロー大学神学部が自由主義に偏したとき、オラフ・モー、ハレスビーなどが、聖書信仰に立って、

新しく独立神学校を創設しました。丁度、アメリカで、プリンストン大学から、メイチェン、ヴァンテイルなどによって、ウェストミンスター神学校が創設されたのと同じです。ホアス校長も、さかんにオラフ・モーやハレスビーの話をされました。

ハレスビーは 1879 年、オスロー近辺の農家に生まれました。両親はハウゲ運動に属する熱心なクリスチャンで、ハレスビーも 23 才の時に、悔い改めと救いの体験をしました。ドイツのエルランゲン大学に学んだ後、創立されたばかりの独立神学校で教義学の教授に就任、72 才の定年まで勤めました。ＩＶＦの創立者、また、第二次世界大戦中ドイツ占領下のレジスタンスの指導者、説教者、著述家としても活動しました。彼の著作のうち、「祈りの世界」「みことばの糧」「みつばさのもとに」は私がノルウェー語から直接、飜訳出版しました。1930 年に書かれた「みことばの糧」を読み、80 年前のノルウェーを、今の日本に読み替えると、あまりにもピッタリと当てはまるのに驚きます。

「現在の世界の状況を見渡すと、何かしら無力感が迫ってきます。つぎからつぎへと犯罪が報道され、ある裁判では無罪となり、他の場合は有罪となって刑務所に送られます。人々は、公に悪事を働くこともあれば、ひそかに悪事を働くこともあります。社会全体が公認しているような不敬虔な行為があります。また、大部分の市民は、黙々と正直で、勤勉に、有能さをもって働いていますが、全く神には無関心です。

もちろん、教会や他のキリスト教の集会にも人々は集まります。しかし、来ない人たちの数はそれに何十倍もするでしょう。私たちは、こんな世の中で、神のことばを語り聞かせることは可能だろうかと失望気味になることがあります。

しかし、ぶどう園のたとえを通して、イエスは、どのような人にも、神に語りかけられた経験があることを示しています。その内的な経験が、外面的な生活にあらわれています。

神は、ノルウェーのすべての市民に、目に見えないところで、ひとりひとりに福音を語りかけられています。そこにもれている人は、ひとりもありません。

『子よ』と親しく神に声をかけられた時、そこに、耳を傾けて従わねばならないという気持ちが生じます。

神の声を真剣に聞いた時、人生はかえってきびしいものになります。なぜなら、今まで当り前に過ごしていた人生が、じつは天の父なる神へのかぎりない背信の生活であるということが判ってくるからです。それで『お父さん、承知しました』と答えて、出かけて行かないか、それとも神の声に従うか決断の毎日がはじまるのです。」

また、神学校開校の 1957 年には、82 才と 77 才になっていたウィンテル、スタイワルト両先生は日本福音ルーテル教会の退職宣教師であり、しかも、49 年前の明治 42 年（1908 年）、熊本新屋敷のスタイワル邸で神学校が創設されたとき、４名の教授の中の二人でした。二人の神学的立場は、ジェイコブスの「キリスト教教義学」と同じであり、それが、1908 年にも、1957 年にも、神学教育の基本として通用したことは興味深いことです。ウィンテル博士の神学的立場は一言でいうならば、「聖書は神の霊感によって書かれた神のことば」（テモテ第二３章 16）で言い尽くされていると思います。

ウェストミンスター神学校での学び

改革派神学校で、岡田稔校長やマキルエン先生その他の諸先生と知り合いとなり、そのつながりで、1967 年～68 年にかけて、フィラデルフィアのウェストミンスター神学校で学ぶことになりました。榊原先生についで、エドワード・ヤング博士のもとで学んだことが、私の原典主義に磨きをかけることになりました。私が直接神学修士課程（M. Th）に入学できたことは大変ラッキーなことでした。もし、M. Div. でしたら、改革派の神学、とくに、弁証学に時間がとられて修了することはできなかったでしょう。ヤング博士の個人指導で、エチオピア語を履修、三ヶ月でルツ記と創世記 10 章まで読んだのが博士を大いに感動させたようです。1968 年２月 17 日、ヤング博士の突然の死によって、わずか５ヶ月の個人的な指導は終わりを告げました。せっかくの「イザヤ書の統一性」を「心をかたくなにするメッセージ」を出発点として「隠れたる神」をキーワードにしながら「苦難のしもべのうた」までのイザヤの神学思想を

辿って見るという構想は頓挫し、それは、セントルイスのコンコーディア神学校での博士論文、そして、いのちのことば社の聖書注解、旧約の部第三巻「イザヤ書」において一応完成することになります。また、その要約は、2010 年７月、アジア神学協議会出版の「神学モノグラフ、第一号、イザヤのメッセージ、テキストそのものに聞く」に英文でまとめることができました。ATA Monograph, I; *The Message of Isaiah, A study of the text itself*, by Gyoji Nabetani, 2010.

ウェストミンスター神学校での、もう一つの出会いは、服部嘉明先生との出会いでした。1951 年～1955 年まで、三田のサナトリウムに入院していた私は、大阪のフリーメソジストの神学校から毎日曜午後、サナトリウムの集会室で説教される先生の力強いメッセージに耳を傾けました。服部先生は、卒業後、福島県平の教会で牧会、1956 年、ロチェスターのロバート・ウェスレイアン大学、さらにアズベリー神学校を経て、1962 年からウェストミンスター神学校の修士課程を終了、さらに博士課程を終えようとしていたところでした。15 年ぶりに会った服部先生は、サナトリウムを訪問した頃の引き締まった童顔の神学生ではなく、アメリカに 10 年以上生活したスマートな紳士でした。服部先生の方も、白衣を着て痩せた結核患者の面影からあまりにもちがった私を見て同一人物であるかどうか疑われたかも知れません。実に 15 年ぶりに、改革派神学のメッカであるウェストミンスター神学校で、ただ一人のウェスレイアンと、ただ一人のルーサランが出会ったのでした。そして、このことが、日本での、福音主義神学会での働き、つづく、アジア神学大学院の日本校設立のための協力などにつながって行きました。

ウェストミンスター神学校では、聖書資料との出会いに関するもう一つの思い出があります。それは、1967 年の 12 月 21 日のことでした。神学校がクリスマス休暇に入ったので、私は、ニューヨークの郊外にある、リバティーコーナのムッタハウスで休暇を過ごすべく、フィラデルフィアから北へ向かいましたが、途中でプリンストン大学に寄り、有名な図書館を見学しました。立派な図書館を見学していると、一つのコーナーで古本を販売していました。その中に、なんと、死海文書第４洞窟の断片写本の写真集があるではありませんか。値段を見るとたった５ドルです。ウェストミンスター神学校では、ＢＨＫ（ビ

ブリア・ヘブライカ・キッテル）が教科書で、ヤング博士は特に死海文書の異読に注目していました。それ以来、この写真集を手許に置いて、時々開いてはモティベーションを高めています。1979 年、80 年、92 年、93 年と四回にわたって、マーブルグを訪問、ヴュルトヴァイン博士にお会いして、「旧約本文の研究」を飜訳していることと、当時進捗中のＢＨＳなどについて意見を交換することができました。その間に博士は大幅な改訂版を出版、それを、1996 年には、本間敏雄先生と共訳できたのも、死海文書の写真集を何遍も見る日常性に押し出されているのかも知れません。

また、2001 年には神戸で聖書展が開かれ、実行委員長の私は死海文書展示の交渉のため２度、エルサレムに出かけ、その結果、イスラエル考古局局長ハバ・カッツ女史が自ら、詩編断片写本とイザヤ断片写本を神戸に運んでくるのに成功しました。その後も、ハバ・カッツ女史とは文通により、イスラエルの考古学発掘の進捗状況を知り、また、イスラエルに行った時には、ベテシュメシュの発掘物の展示場とか、ロックフェラー博物館の地下にある、死海写本断片写本の実物を見せてもらったりしています。

2006 年、日本聖書協会の主催による、国際聖書フォーラム 2006 年が東京で開かれたとき、私は東京に出かけて行き、トブ博士（元死海文書刊行国際チーム総責任者）に神戸ルーテル神学校に来て講演するように招いて成功しました。それ以来、ハバ・カッツ女史と、エマヌエル・トブ博士とは親しく交際しており、イスラエルの考古学の進捗状況と死海文書の研究状況を知るための重要なリソース・パーソンになっています。ＢＨＫからＢＨＳ，さらには、ＢＨＱの時代になっても、とくに、死海文書と７０人訳ギリシャ語を読み解くには、単なる知的技術の積み重ねを超えたものが要請されます。ただ、書物によって得る知識を超えたものが必要です。昨年、オランダ在住の村岡先生が７０人訳ギリシャ語事典を出版され、海外の方が村岡先生に高い評価を与えておられます（T. Muraoka, *A Greek Lexicon of the Septuaginta*, Peters, 2009）。本年 6 月に出版された『聖書神学事典』の最初の解題に村岡先生の「聖書の言語」の項目があり、この分野の最新の情報を得ることができます。

旧約聖書の飜訳事業に携わって

1970－72 年、セントルイスのコンコーディア神学校で「イザヤ書の統一性」で博士号を得た私は、帰国後すぐ、新共同訳聖書の旧約の翻訳委員に選ばれました。

それは、第二ヴァチカン会議の結果、世界的なエキュメニカルな流れのなかで、1970 年にプロテスタント 5 名、カトリック 5 名からなる共同訳実行委員会が発足、翻訳の方針、予算などが取り決められ、46 名の翻訳者が選考される最後に、1972 年 6 月に帰国したばかりの私が選ばれました。旧約の翻訳者は 23 名で、私はおもに小預言書を担当しました。

当時の雰囲気から言えば、1970 年に出版された新改訳への対抗意識はなく、むしろ初めてのカトリックの翻訳者との共同昨業がうまくいくか、外典の扱いはどうするかが関心事でした。翻訳の基本は「今まで聖書に触れていない多くの人々のために、大衆的で、かつ学問的な翻訳をめざし」「ダイナミック・エクイヴァランス（動的等価訳）理論」を用いるとされました。しかし、23 名のグループが、５書、歴史書、預言書のグループに分かれ、各自の担当部分を持ち寄って、検討するプロセスにおいて、「動的等価訳」なる翻訳に到達するには、ほど遠く、一語のヘブル語の表現の確定に数日を要するばかりで、忙しい働きざかりの翻訳者達が六甲のＹＭＣＡとか、札幌のトラピスト修道院で数日を費やしても、なにほどの成果があがりませんでした。その上、各グループの結果を全体の翻訳者に回し、意見を聞くプロセスもあり、時間はいたずらに経つばかりでした。そのうちに、原本文はＢＨＫからＢＨＳへと切り替わりました。結論からいえば、「動的等価訳」は、原語に通じ、日本語も有能で、とくに言語的感覚にすぐれた数名が、翻訳事業に専念する環境を与えられてはじめて実現しうるものでしょう。1978 年に「新約聖書共同訳」が出版されましたが、じっさいには、普及に至りませんでした。1983 年には、翻訳の根本方針が変更され、「教会外の一般の人々へ判り易い聖書」から「教会の人々が納得し、且つ礼拝にも使用しうる聖書」と変わりました。個人的な経験からいえば、グループの中での議論は、原語の意味を本文学的に確定し、原語の意味をまず正しく把握することに力を注ぎ、結果的に現在の新共同訳に近いものになっていたと思います。そうでなければ、カトリックとプロテスタントの翻訳

者たちが納得する着地点は見いだせなかったからです。

一方、私は、1973 年から、いのちのことば社の新聖書注解シリーズの旧約の執筆依頼を受けました。最初に「預言書」、翌年に、「イザヤ書」、そのあと一年おいて、「ヨシュア記」「士師記」を執筆しました。その後、「聖書講解シリーズ」の監修と「箴言」を執筆しました。いのちのことば社からは、「詩編を味わう」シリーズ、また、今、「創世記を味わう」を出版中です。これらに使用する聖書本文は、もちろん「新改訳」であり、「新改訳３版」であります。じっさいに、新共同訳よりも、新改訳の方が何倍も接することが多いのです。しかし、私の牧会している教会では、今も「口語訳」を使用しています。

2003 年新改訳は第三版において不快用語その他の訂正をし、また翻訳の方針を明らかにしています。それは、原文を直訳し、判りにくい意味は何回も読み、いわば「トランスペアレント（透けて見える）」な読み方です。それについては、「聖書翻訳を考える」新改訳聖書刊行会編、いのちのことば社、14－16 頁によくまとめられています。

福音主義神学会設立の機運

1969 年 10 月 20 日（月）の午後、6 人の者が、東京御茶の水の学生キリスト教会館の４階にある JPC（日本プロテスタント聖書信仰同盟）事務所において会合し、「日本福音主義神学会」設立のための構想について話し合いました。その６人は、泉田昭（日本バプテスト教会連合実行委員長、練馬バプテスト教会牧師）、宇田進（日本基督神学校教授、日本基督長老久我山教会牧師）、今野孝蔵（練馬神の教会牧師）、斎藤孝志（東京聖書学院教授、府中ホーリネス教会牧師）、榊原康夫（日本基督改革派教会常任書記長、東京恩寵教会牧師）、村瀬俊夫（蓮沼キリスト教会牧師、聖契神学校講師）でした。6 人はみな、牧師でありながら、日本の福音主義的グループの神学的交流ならびに対話の促進に強い関心をいだいていました。この６人は、一人を除いて、昭和の初期の生まれです。すなわち、みな 40 歳前後の働きざかりであり、ヴィジョンとヴァイタリティ をもってことにあたることができました。

構想の第一歩は、日本福音主義神学会の設立を呼びかける懇談会をさらに多

くの同志たちを招いて開催することでした。

懇談会は斎藤孝志氏の司会で進められました。まず宇田進氏が挨拶に立ち、大要次のように語って、日本福音主義神学会の設立を要求する客観情勢を明らかにしました。すなわち、「①現代の神学思想史的流れから見るとき、ブルトマンの影響が圧倒的であつた 50 年代が過ぎ、60 年代はブルトマン後の時代にはいり、福音主義神学が強力に発言すべき好機を迎えている。②現代のキリスト教会における最大の課題は、積極的な宣教の神学を確立することであり、この点で福音主義の強力な発言が期待されている。今、教会と現代社会とのかかわりを追究する社会倫理の分野を開拓する必要がある。③そのために、福音主義の神学者たちが共同で研究にたずさわるコミュニティ（共同体）の形成が不可欠である。」

懇談を有効に進めるために、あらかじめ有志６人で作成した日本福音主義神学会の「規約案」が出席者全員に配られていました。その土台は「本会は、聖書の十全霊感を信じる福音主義キリスト教の立場において、神学的研究を志す者相互の連絡を計るとともに、日本における福音主義神学の発達を期する」という立場と目的であります。さらに、伝道の第一線にある牧師伝道者にプラスとなる会のあり方が強く求められ、教会に奉仕する姿勢をはっきり打ち出すべきであるとの意見が支配的でした。

1970 年 1 月 26 日（月）、練馬バプテスト教会で、日本福音主義神学会設立発起人会が開催されました。会は第一部・礼拝、第二部・事務会に分かれ、第一部の礼拝が宇田進の司会で守られました。説教者は榊原康夫氏で、ルカによる福音書 11 章 45-52 節から「知識のかぎ」という題でした。礼拝のあと、斎藤孝志氏の司会で、総会がもたれました。発起人を受諾した 66 人のうち 28 人が出席しました。

審議の結果、第１条の名称は異議なく認められ、「日本福音主義神学会」が正式の名称となりました。第２条の事務所の場所は、原案どおり「東京都東村山市廻田町 1 ノ 1477　東京聖書学院内」とすることが認められました。第 3 条の立場と目的は分けて、第３条に立場、第４条に目的をしるすべきだという意見が多数を占めました。また目的の最後の「教会の健全な成長と発達を期する」は、この神学会が教会に仕えるものであることを明確にするため、「教会

の健全な成長と発達に奉仕する」と改めるように、大方の意見の一致をみました。これによって、この神学会は一部の神学好きのサークルではなく、伝道の第一線にある牧師や伝道者を励まし、地道な教会形成に奉仕するものであることが確認されました。

発起人会以後、設立総会開催まで

1970 年 4 月 27 日午後 1 時半。設立総会は、プログラムのとおりに進行しました。

日本福音主義神学会　設立総会プログラム

第一部　開会礼拝　（午後 1 時半－2 時半）　〈司会〉山口　昇

一、讃 美 歌　194
一、聖　　書　ローマ 1:1－17　伊藤顕栄
一、祈　　り　小林和夫
一、説　　教　「神の福音」　吉岡　繁
一、讃 美 歌　267
一、献　　金　丹羽　喬
一、頌　　栄　541
一、祝　　禱　常葉隆興

第二部　総会議事　（午後 2 時 45 分－5 時）　〈議長〉矢内昭二

一、議長あいさつ
一、経過報告、会員紹介　村瀬俊夫
一、規約審議　〈説明者〉今野孝蔵
一、事業計画　〈説明者〉榊原康夫
一、予算審議　〈説明者〉今野孝蔵
一、役員選出

開会礼拝の説教の中で、吉岡繁氏は、「神学は、神について私たちがどれほど知ったかより、罪人である私たちを神がどれほど愛し、知りつくしておられるかを知ることから始まらねばならぬ」と、聖書に啓示された「神の福音」－旧約聖書において約束され、イエス・キリストの十字架の死と復活によって成就された福音を宣明していくことが、日本福音主義神学会の使命であることを力説されました。会員名簿に掲載された総会会員は、正会員 86 人、準会員 3 人、名誉会員 11 人、計 100 人でした。

事業計画では、年 1 回の会誌の発行のほか、研究報表会ならびに公開講演会を開催することが承認されました。

予算審議では、必要経費 50 万円（会誌発行費 25 万円、行事費 15 万円、事務費その他 10 万円）を、会費収入 30 万円、献金その他の収入 20 万円で充当する案を承認されました。

最後に、役員（理事）の選出を行いました。

〈理事長〉　矢内昭二
〈事務担当理事〉　編集　宇田　進、榊原康夫
書記　村瀬俊夫、斎藤孝志
会計　今野孝蔵、泉田　昭
〈部門担当理事〉　聖 書 学　山口　昇、伊藤顧栄、丹羽　喬、服部嘉明、鍋谷堯爾、榊原康夫
組織神学　小林和夫、宇田　進
歴史神学　泥谷逸郎、舟喜　信
実践神学　吉岡　繁、尾山令仁
宗教学・宗教哲学　矢内昭二、H・スコーグランド、H・A・スミット

上の 19 人の理事のうち、理事長と事務担当理事全員、部門担当理事の中から山口昇、伊藤顕栄、丹羽喬、舟喜信、H・スコーグランドの計 12 人が常任理事に選ばれました（あとから尾山令仁が加わりました）。

このあと午後 6 時半から記念講演会が持たれましたが、定員 150 人のホールは満員となりました。

服部嘉明氏の講演は、学究的関心の乏しかった教会的背景の中で苦しんだ経験から語り、現代のカトリック教会およびユダヤ教における聖書研究の熱心に

ふれながら、御言葉の権威を信じる福音主義的立場において、学究への関心が必要であることを力強く訴えました。それは、①誤った聖書主義に陥らないために、②最近の聖書研究の成果を参考に、注意ぶかく聖書の本文を見るために、③他の立場への理解と評価をもち、福音主義における交わりと一致を進めるために必要であるとの趣旨でした。

規約の主な点は「立場」と「目的」であります。

第三条（立場）　本会は聖書の十全霊感を信じる福音主義キリスト教の立場にたつ。

第四条（目的）　本会は前条の立場にたって、神学的研究を行ない、相互の交流をはかり、教会の健全な成長と発達に奉仕することを目的とする。

第五条（事業）　本会は前条の目的を達成するために左の事業を行なう。

一、研究会の開催
一、講演会の開催
一、会誌の発行
一、その他本会の目的に必要ある諸活動

細則において、５つの研究部門が定められました。

第六条（部門）　本会は左の五つの部門をおく。

一、聖 書 学
一、組織神学
一、歴史神学
一、実践神学
一、宗教学及び宗教哲学

４０年の歩み

いま、40 年をふり返る時、福音主義神学会はまさに時を得た発足であったといえます。戦後の日本は多くの福音主義に立つ宣教師によって開拓伝道がすすめられました。マッカーサーの「日本に一万人の宣教師を」の呼びかけで、宣教師たちがやってきました。彼らの多くは福音主義の信仰にたって、開拓伝道をすすめました。しかし、一部の宣教師を除いて学問的な関心は希薄でした。

福音主義神学会の創立メンバーの多くは 40 代でしたが、それは、色んな背景であっても、戦争の経験、戦争後の混乱期、そして、一時的なキリスト教ブームと、あまりにも早いブームの消失を経験していました。しかし、福音派の教会はそれなりに、根を下ろし、伝道の将来に楽観的であったと言えます。一方、戦前からの日本キリスト教団が万博問題で分裂し、神学的に混迷していました。

この 40 年間に福音主義神学学会誌は順調に出版され、地道ですが、日本のキリスト教会に大きな貢献をしてきました。約 150 の論文の中で聖書神学部門の論文、または、関連論文は半数を占めています。

学会誌は１５号からテーマごとの編集をしました。

１９８４年	１５号	霊感の用語と概念
１９８５年	１６号	生と死
１９８６年	１７号	福音主義の聖書解釈
１９８７年	１８号	教会論
１９８８年	１９号	福音と文化
１９８９年	２０号	創造論（３－２１ページの佐布正義氏の「回顧と展望」は２０年間の学会の歩みを学会誌と研究会議を軸に分析されている貴重な論文と言えます。）
１９９０年	２１号	福音と日本文化
１９９１年	２２号	救済論　（８９－９５ページに２１号までの論文リストがのっている。）
１９９２年	２３号	聖霊論
１９９３年	２４号	礼拝論
１９９４年	２５号	科学と信仰
１９９５年	２６号	戦後日本の教会
１９９６年	２７号	戦争
１９９７年	２８号	人間の宗教性
１９９８年	２９号	説教
１９９９年	３０号	聖書解釈学
２０００年	３１号	終末論

２００１年	３２号	女性教職論
２００２年	３３号	牧会カウンセリング
２００３年	３４号	「いのち」をめぐって
２００４年	３５号	讃美歌
２００５年	３６号	祈り
２００６年	３７号	霊性
２００７年	３８号	日本の宣教を考える
２００８年	３９号	病といやし
２００９年	４０号	伝道

福音主義の立場は、聖書の十全霊感を信じる信仰ですが、それを学問的に見るためには、15 号、17 号、30 号が重要です。15 号には、最近召された舟喜順一氏の「霊感の用語と概念―用語整理のための覚え書き―」が最初の論文としてのせられています。17 号には、津村俊夫氏の「福音主義の聖書解釈―その方法論的確立をめざして―」と宮村武夫氏の「聖書解釈の基盤と方法（論）をめぐって」の二つの論文がのせられています。30 号には、３つの論文が載せられています。伊藤明生氏の「テキスト、意味そして読者―解釈学からの挑戦」、津村俊夫氏「の『ポストモダン』聖書解釈――特にインターテクスチュアリテイー（間テキスト性）について」、橋本昭夫氏の「ルター主義における釈義原理」。伊藤明生氏の論文は発展して「聖書神学事典」の「聖書の解釈」の項目にまとめられています。

40 年間の貴重な約 150 篇の論文、その他の「ノート」、また、書評を見るとき、これらの論文が福音主義の立場に立つひとつの研究の遺産としての視点をもってまとめる手段はないかと思います。今回、私の研究はアジア神学協議会の神学モノグラフとしてまとめられましたが、「生命論」「戦争と平和」「日本の宗教性」などを、小冊子や英文モノグラフ・シリーズなどとしてまとめる方法もあるかと思います。

神学会の規約では、研究部門は５つに分けられていますが、150 篇を機械的に分けることは難しいということが判りました。また、40 年前に生まれた牧師先生や神学者や役員のかたがたが、神学会のリーダーシップをとって前進し

ておられる時代に、「助言」やまして「叱咤激励」などおこがましいことは言えた義理ではありません。

ただ、アウグスティヌスが 50 歳代になって、ゲルマン族によってローマが陥落し、難民がヒッポにも押し寄せて来たとき、「この世は老いています。しかし、クリスチャンは老いてはなりません。キリストに結ばれて若返りなさい。（イザヤ 40 章 31 節）」という声に耳を傾けたいと思います。

最近、シェロモー・サンドの「ユダヤ人の起源」を読みました。（2010 年 3 月、浩氣社）それによると、ユダヤ人のアイデンティティは種族的でなく、宗教的であるということが説得的に論じられています。すなわち、ギリシャ語７０人訳によって旧約聖書にふれた人たちが何百万もユダヤ教に回心し、ユダヤ人とよばれるようになりました。私は、ヘブル語の旧約聖書になじんできて、７０人訳ギリシャ語聖書は新約聖書引用の箇所だけに集中してきましたが、改めて全体的に７０人訳ギリシャ語を読み直すことが必要なようです。幸い五書は秦剛平氏の名訳がありますが、その他の箇所も読み直すのは「全くシンドイナ、それまで、イノチが持つだろうか」というのが正直な気持ちです。

しかし、アウグスティヌスもパウロも「前のものに向かって」とすすめていますから、４０代の若い方々の背中を見ながら、一歩でも歩んでいきたいと願っています。

（神戸ルーテル神学校教授）